

シンポジウム

「ポスト3・11を生きる理性」

趣意書

昨年3月11日の大震災・原発事故が日本社会に与えた巨大な衝撃は、この1年あまりの間、「ポスト3・11」というかたちでさまざまに語られてきた。当初から3・11を「第二の敗戦」になぞらえる声が聞かれたように、この新たな時代の切れ目は、さしあたり「戦後」に匹敵するものとして理解された。津波によって瓦礫と化した被災地の状況は、空襲で焼け野原となった戦後の光景と重ねられ、爆発で崩落した福島原発の状況は、あたかも広島・長崎の被爆地の光景を思い起こさせるものであった。そして「復興」が叫ばれ、「がんばろう、日本」の言葉が国中にあふれた。だが、思うように進まない「復興」とともに当初の衝撃が薄らいでゆくなかで、ますます見えにくくなったのは、3・11がどのような時代の切れ目であり、またあるべきなのか、という点である。

もとより「戦後」と「3・11後」とはまったく異なる。軍国主義の時代の終わりに各地の軍都を襲った空襲による戦災と、それらの都市の戦後の復興と繁栄のかたわらで過疎化し疲弊した地方を襲った大津波による被災。戦時に原子爆弾の標的とされた2都市の惨禍と、原子力の「平和利用」のもとで地方に集中立地された原発による事故災害。これらの異なる経験の一つを重ねて「復興」というただ一つの言葉でいまの日本を語ろうとするとき、経済の成長戦略がなおも前面に立ち、3・11の切れ目は不可視のものとなる。「被災地域の復興」と「日本経済の再生」とを一体のものとして強調した政府の基本方針（2011年7月）は、そうした方向性を色濃く打ち出すものであった。戦後日本にとって、3・11がどのような歴史的課題を提起するものか、そこではまったく不問のままである。

かつてマックス・ホルクハイマーは、1946年に『理性の腐蝕』を書いて、ファシズムに勝利した民主主義の戦後社会に向けて、変質しつつある理性による非人間化の可能性について深刻な危惧を表明していた。産業主義の発達によって道具化された理性は、人間の精神的根拠を腐蝕させ、物質性と盲目性のなかで人間と自然とを抑圧する狂気と野蛮を再現させかねないと、ホルクハイマーは理性の危機に立ち会う「哲学」の課題を示して語った。

欧米の「戦後」にさいして発せられたこの警告は、「3・11後」のいま、痛恨の念をもって日本で思い返されるべきであろう。戦後の復興に続く経済的繁栄と歪み、近年の構造改革、そして成長政策と一体となって推進された地震国日本での原子力政策。ふり返ればそこに戦後の民主主義のもとで進行した「理性の腐蝕」を見ない

わけにはゆかない。とりわけ「札束と権力」によって進められた原子力政策は、「原子カムラ」という言葉に象徴されるように、腐蝕のきわみであろう。そうした腐蝕が、ホルクハイマーが示唆したように、戦前と戦後とを通底する精神構造であることもやはり否定できない。それに対して「哲学」は、理性と自然との破局的な対立の局面にあって、真理を標榜する腐蝕した理性を拒絶し、その否定を超えて真理の理念と歴史的現実との再接続を図らなければならない、というのである。

「ポスト3・11を生きる理性」という本シンポジウムのテーマは、こうしたホルクハイマーの理性批判を念頭に置いている。3・11の切れ目を不可視のものとする復興の議論と政策に対して、シンポジウムでは3・11後の状況のなかから理性と現実との再接続を図って討論を進めたいと思う。焦点は、「ポスト3・11を生きる」という点にある。これまで本研究協会では、3・11以前の経済社会構造の歪みについて分厚い批判を重ね、社会的に発信してきた。その否定的構造が破局的局面を現出させたいま、困難な現実のなかでどのような可能性を引き出すことができるのか、3・11後の理性の可能性に具体的に踏み込んで議論を行いたい。

そのために三つの視点を用意した。

第一は、独立系メディアの可能性である。今日まで、道具化された理性が非理性へと反転する典型は、大衆社会のもろもろの文化装置によって、民主主義が操作された盲目的な多数者の支配に反転する場合であった。一方、パーソナル・メディアが広く普及していた3・11後の経験は、従来のマス・メディアがいかに隠蔽と欺瞞に満ちたものであるかを白日の下にさらすものであった。従来のメディアへの不信が拡大するなかで、真実に迫ろうとした独立系メディアの意義に注目したい。

第二は、未来を担う若者たちの経験である。3・11後の若者の経験はそれぞれ異なるが、被災地でのヴォランティアに参加した若者、反原発デモに参加した若者も少なくなかった。近年まで若者の主観的な「自分さがし」に注目する議論が目立ったが、ここでの「哲学」の課題は、主観的理性と客観的理性との、そして精神と自然との二律背反的世界を克服することである。3・11後の現実に立ち会う若者の体験は、なお認識の壁に隔てられながらも、そうした理性の真実と隣り合わせにあると言えるのではないか。

第三は、3・11後の理性の可能性をめぐる社会思想的な検討である。ホルクハイマーは啓蒙以来の理性の危機を論じて、それを反省する「哲学」に課題を託するところで検討を終えたが、上記の二つの点からも推察されるように、いまや社会思想的な次元で3・11後の世界を構想することが必要である。それは、3・11後の民主主義と政治について真摯に考察し、その後の社会を構想することにつながるであろう。